「出会いの選択のために」

藤岡　俊博（教養学部）

私は前期課程ではフランス語・イタリア語部会、後期課程では教養学科地域文化研究分科フランス研究コース（通称「フランス科」）に所属しています。ふだん駒場キャンパスに生息していますが、前期課程では基本的にフランス語を教えており、大人数の講義科目などを担当していませんので、前期課程の学生さんの大半には存在を知られていないと思います。

私は1999年に文科Ⅲ類に入学し、後期課程で地域文化研究学科フランス地域文化研究分科（当時）に進学しました。25年も前の話で、後期課程の分科やコースも大きく様変わりしていますし、「優」以上の割合に関する申し合わせもありませんでした。進学選択が「進学振分け」（「進振り」）と呼ばれていた時代です。

一部のフランス語履修者としか接点がない教員の昔話がはたして参考になるだろうか……と、原稿の依頼を受けたときは逡巡しましたが、一人ひとりがそれぞれ異なる進路を歩んでいくなかで、そもそも自分が誰かの参考になればと考えるほうがおこがましいと思い直しました。以下の文章では、ただの自分語りになる危険を承知のうえで、できるだけ教訓や助言を挟まないように、自分の経験を過去にあった事例の一つとして紹介したいと思います。

ありふれた話ですが、私は子どもの頃から歴史が好きで、司馬遼太郎や新田次郎の小説を愛読していました。高校では、楽しい授業を展開してくださった世界史の先生に憧れ、講談社現代新書から当時出ていた各地域の通史などもつまみ食いをして読んでいました。その先生が東大のドイツ史専攻だったと聞いていたため、文科Ⅲ類に入学したときには、先生と違う言語をとフランス語を選んだうえで、進学先としては先生と同じ西洋史への進学を考えていました。ちなみに私の恩師は、『岩波講座　世界歴史』の編者で、『世界史とはなにか』（岩波新書、2023年）などの著書を通じて世界史教育について精力的に研究と発信をおこなっていらっしゃる小川幸司先生です。

このように書きますと、私が恩師の影響のもとではじめから堅固な意志で進路を決めていたようですが、実際には「進振り」の制度もよく理解しておらず、ただ漠然としたイメージを抱いていたにすぎませんでした。インターネットもSNSもない時代に、地方の公立高校から浪人して入学した自分にとって、大学について知ることができたのは『赤本』の最初の部分に載っている先輩の体験談くらいだったからです。なので、入学した直後に、フランス語の必修クラスの同級生たちの多くが、「進振り」で教養学部への進学希望を強く語っていたことは大変な驚きでした。なかでも国際関係論が人気だったように記憶しています。そして後期課程で教養学部に進学するために、当時80点以上の平均点が必要だと知ったときには、自分とはまったく縁のない話だと思っていました。

「進振り」を実際に意識し始めたのは、1年のAセメスターだったと思います。その頃には、クラスのなかで「駒場に残りたい」という熱意も少しずつ沈静化していました。私のほうでも、歴史教科書をめぐる当時の喧騒のなかで、専門として歴史学を学びたいという気概を失いかけており、むしろ、浪人時代に聞きかじったフランスの現代思想への関心が、論壇でも活躍されていた高橋哲哉先生の講義を通じてますます強くなっていました。語学の勉強はもともと性に合っていたようで、必修のフランス語に加えて、ドイツ語やギリシア語、中国語の授業を履修していました。進学先の候補としては、西洋史にかわって哲学と仏文が浮上してきましたが、いまひとつ決定的な動機づけが得られないままでした。

転機となったのは、フランス語の同級生で、親しくしていた友人のＩ君との会話でした。Ｉ君によれば、哲学科に進学しなくても哲学の勉強はできる、地域文化研究学科ならフランス語の力がつけられるから哲学の勉強にもプラスになる、というのです。そう言われても、地域文化研究がどういう学問かもわかっておらず、半信半疑で聞いていた私の背中を押したのは、高橋先生も地域の「フランス科」のご出身だよという一言でした。もともとフランス語の勉強が好きだったことも幸いし、それからは地域文化研究学科への進学を目指して、成績のことも意識しながら過ごすようになりました。

なんとか「フランス科」、当時の名称では地域文化研究学科フランス地域文化研究分科に進学が内定した２年生のＡセメスターには、それまでとはまったく違った生活が待っていました。フランス語を始めてわずか１年半の人間が、突如として、アレクシス・ド・トクヴィルやジョルジュ・バタイユ、マルク・オジェといった名だたる著者の難解なフランス語の海に放り込まれたのです。ほぼすべての授業が少人数の演習形式で、予習のために夜更けまで辞書を頼りにフランス語と格闘する日々が始まりました。授業の前後には、「フランス科」の研究室に立ち寄り、お昼ご飯を食べたり、読書会をしたりしていました。研究室には大学院の先輩方もいらっしゃって、先生と遜色のない学識に畏敬の念を抱くのがつねでした。５限後には、先輩や同級生と下北沢でお酒を飲むこともたまに（頻繁に？）ありました。それまで研究者になるなどとは想像したこともありませんでしたが、大学院の先輩たちと親しくさせていただくなかで、自分も大学院に進学したいという思いが自然と湧いてきました。そこから先輩方の真似をするようにフランスに留学し、いくつかの大学で教える経験を経て、五年前に自分の育った「フランス科」に戻って現在に至っています。

このように振り返ってみますと、自分はそのつど周囲のひとの影響を受けて、主体性のない選択をしてきたものだとつくづく思います。その一方で、なにものにも左右されない、自分の意志のみによる選択など可能だろうか、とも思います。この文章を読んでくださっているみなさんも、同じように考えるひとが多いのではないでしょうか。「進学振分け」がいつから「進学選択」と呼ばれるようになったのかは調べていませんが、「振り分け」は受動的な印象を、「選択」は能動的な印象をより強く与える言葉です。実際には、「選択する振り分け」であると同時に、「振り分けられる選択」であるというのが実情でしょう。これは教訓でも助言でもなく、単なる事実にすぎません。

こうした能動性と受動性のあいだを指す便利な表現に、「出会い」という言葉があります。自分を主語とすれば、「出会い」は対象としての誰かと出会うことになりますが、そのとき自分もまた、目のまえにいる誰かの対象として出会われています。「出会い」は、どんな選択がなされたときにも出現する、能動的であると同時に受動的な集合的経験だと言えます。

最後に自分が「フランス科」に進学して最も良かったことを述べて終わりにします。それはＩ君の言葉どおり、曲がりなりにも職業として成立するほどにはフランス語ができるようになったことです（もちろん外国語の勉強に終わりはなく、自分の至らなさを痛感する毎日ですが）。実は、私に進学先を紹介してくれたこのＩ君も一緒に「フランス科」に進学し、同じような道のりを経て、現在は某KO大学でやはりフランス語を教えています。Ｉ君は自分の進学選択をどのように振り返るのでしょうか。今度会ったときに、お酒を飲みながら聞いてみたいと思います。

みなさんが選ぶ進路の先に、素晴らしい「出会い」があることを願ってやみません。